若會文淡

一

1曾5
489
1

門イ音5
孫489
巻1—10

宗教大学図書

茗會文談總目

巻之一

㊀人欲の事
㊁和名の事
㊂夜宴ヨ燈ヨ油を加ふる説
㊃裘の事
㊄學問をすれば貧ヨあるといふ事
㊅雷の事并天狗の説
㊆水滸傳の事

八 酒の趣向の事
九 梨も礫も打ぬといふ事
十 川越合戰の事
十一 神代杉の事
十二 六指を治す法の事
十三 身力ゐ不應の事
十四 食後睡眠の事
十五 素心先生墓の事
十六 好事不出門の事
十七 眉間白毫の事
十八 蝦夷地の事
十九 弓鉄炮の事
二十 殺生石の事
廿一 天地の事
廿二 山田春城の事
廿三 陰陽の事
廿四 什物の事
廿五 岡西宗貞の事
廿六 虚誉の事 附小松重盛の事

此巻一目録は下文巻一目録并本文も合はず畢竟下文の二つハ誤て五字間をすれハ云々を脱ゝこるより齟齬を生ゝるものゝて此目録の方ゝぐゝ

巻之二

㊀ちんら
㊁射術
㊂くはず貧樂
㊃古代の石
㊄造石の法
㊅油烟松烟
㊆五分くの辞
㊇人性
㊈大塔宮
㊉板行書籍
㊊遺恨
㊋掘出し
㊌唐土人情
㊍ゐらの上
㊎ひらだいらだ
㊏奉公を構ふ
㊐年を經て花の院との歌

十八 穀蠹
十九 一休和尚
廿 馬をせもる
廿一 木綿
廿二 荻生茂卿
廿三 和歌
廿四 やまとの訓
廿五 櫛
廿六 矢人川村
廿七 鯨

廿八 人の道
廿九 矢束
三十 獸肉
卅一 やまと歌
卅二 地震
卅三 日の字訓
卅四 燒餅をうる老婆
卅五 雪
卅六 いろは

㊀ 犢鼻褌
㊁ 墨は餓鬼よすらせ
㊂ 福善禍淫
㊃ 生々の理
㊄ 孝道
㊅ 日本弓
㊆ 古今風俗
㊇ 蹈襲
㊈ 地名

巻之三

㊀ 總角
㊁ 無花菓
㊂ 口耳の間四寸
㊃ 助語
㊄ 飯
㊅ 唐四百州
㊆ 日本七道
㊇ 奏樂

九 クラハス
十 為の字
十一 佛号
十二 烏
十三 性悪の説
十四 細馬
十五 勘當
十六 一日の始
十七 蟻
十八 風梧隨筆
十九 租稅
廿 年歯
廿一 老醫の説
廿二 父子不和
廿三 月中地影
廿四 神道
廿五 魚一折
廿六 舵

廿七 癖
廿八 櫻
廿九 字ツキ
卅 嬬庶
卅一 神体
卅二 中元節
卅三 注連縄
卅四 神離
卅五 宗脉

卅六 カワヤ
卅七 如是我聞
卅八 人丸
卅九 酒嚢飯袋

巻之四

一 經典
二 文字
三 先祖
四 病鍬
五 神祇
六 まろかふのんの字
七 小笠原楓庵
八 夏祭
九 奇石
十 一坪二坪
十一 費陰禪師
十二 戒定慧
十三 紬
十四 釣針
十五 三子を産
十六 シヤチホコ
十七 伊勢のいみ詞

十八 伊皿子の麁
十九 全浙兵制
廿 神祠
廿一 祐乗彫物
廿二 因果應報
廿三 四声
廿四 北山黄公

卷之五

一 新奇
二 和歌の名所
三 姪肆戯場
四 人參
五 鹽梅
六 賣藥
七 永樂錢
八 和語

九 方士
十 誕生
十一 祓禊
十二 開元錢
十三 經濟學
十四 西蕃
十五 臨時祭
十六 諸藝
十七 對馬國主
十八 長歌
十九 唐太宗
廿 陽明學
廿一 主統
廿二 一條禪閤
廿三 源氏物語
廿四 矢の根石
廿五 カケマクモカシコキ
廿六 まほろつけき

㊀ 格心

巻之六

㊀ 多賀碑
㊁ 楠公墓
㊂ 家隆卿墓
㊃ 觀音命日
㊄ 刑法
㊅ 追故
㊆ 礫
㊇ 火あぶり

九 盜賊
十 博奕
十一 永牢
十二 久離
十三 窮民
十四 徒罪
十五 小普請
十六 毋生山田
十七 ウテツ

十八 狐妖

巻之七

㊀清朝開國
㊁王室
㊂菅公贈官
㊃貧富の説
㊄至善の性
㊅斗唯容斗
㊆為政以德
㊇有治人無治法
㊈量入以為出
㊉歌袋
㊀〇歌冬
㊀〇葬送
㊀〇二十を念七云
㊀〇高森昌元の歌
㊀〇論語讀不知論語
㊀〇ハヤス

巻之八

一 仁德天皇御制衣歌
二 老荘
三 圍碁名手
四 騎馬
五 年賀
六 楠公
七 受領
八 糠雨
九 自得
十 新田の詭
十一 菜蔬
十二 新参
十三 ものふ摺
十四 おるもいふ詞
十五 倹約
十六 五戒
十七 儒中の醫

十八 勘當
十九 阿紫
廿 西行雪の歌
廿一 祓
廿二 容氣
廿三 憤怒
廿四 異見
廿五 兵略
廿六 自然
廿七 三絶
廿八 繭紙
廿九 文具
卅 虎の画
卅一 日本画
卅二 華表
卅三 古代米價
卅四 收斂
卅五 クワタワル

㊀六 本朝制度
㊀七 性善
㊀八 和漢相似語

卷之九

㊀ 世継物語
㊁ 菟裘賦
㊂ 中納言顕基
㊃ 清少納言
㊄ 増賢
㊅ 佛
㊆ 加棟木
㊇ 調度

九 大和國
十 實定公
十一 西行法師
十二 文選
十三 白氏文集
十四 老子
十五 本朝三部本書
十六 梨坪五歌仙
十七 莊子
十八 日本書
十九 臥猪床
廿 紀貫之
廿一 古今和歌集
廿二 源氏物語
廿三 新古今集
廿四 和歌開闔
廿五 梁塵秘抄
廿六 催馬樂

廿七 頓會ゑ琵琶を用ふ
廿八 神樂
廿九 許由
卅 追儺
卅一 四方拜
卅二 門松
卅三 石清水 極樂寺
卅四 高良
卅五 齋宮
卅六 野宮
卅七 小野妹子
卅八 頭飛鼻炊
卅九 習俗
四十 燈燭
四一 古歌の詞 改まりとる事
四二 和冠
四三 鱠

卷之十

一 伊勢
二 加茂
三 住吉
四 春日
五 平野
六 三輪
七 貴船
八 吉日
九 大原野
十 松尾
十一 梅宮
十二 神璽
十三 内侍所
十四 寶劔
十五 神
十六 延喜式
十七 佛法

十八 茶
十九 能因紅葉の歌
廿 短冊
廿一 蝕
廿二 字
廿三 觸纖

茗會文談總目録終

茗會文談序

懿哉龍之於蟲魚也猶麒麟之於走獸鳳凰之於飛鳥泰山之於丘垤河海之於行潦也而其為形也鴻口銅輪豐盈脩長目如電舌如劒腹如玳瑁鱗如列星而望之或如虹霓之垂或如朝陽之日或烟雲為山岳驟首而一躍則雲霧咸集風波忽起鱣鮪於是乎奔走鼉鼉於是乎伏藏猗々懿々大哉龍之物也可謂盛且大也予欲見真物有年于是然而不知其所也或語予曰某州某山之陰有潛龍焉予聞之

大喜不覚起立立而躍者三焉將行而見之既而予自以為龍之為物顯隱屈伸變化無極小則隱於指甲大則蟠於天地上之則薄於日月下之則潛於九淵乍飛乍潛知機察微能其時也猗々龍之為物可謂天下之至靈也予今雖欲見龍而龍若或不欲見也蟠泥中沈深淵避而不見也必矣苟如是邪假令予行以求之亦復何益予於是仰天長嘆曰嗚呼莫龍之難見何其若是也初予欲見之而不知其所也今也雖知其処而不可得而見其行乎龍不見予其不行乎予雖不見龍予將終不得見之乎徐亦自解曰昔者葉公好画龍龍遂来而窺葉公葢葉公者徒好画龍而真龍窺之況予實求真龍者乎彼窺予也不可疑也若其求之之心不誠實也虽行而求之彼疑而不見予也亦不可疑也不求彼于此而徒求此于彼乎遂不果而必愈切也矣

大田元貞才佐

茗會文談卷之一

目録

一 人欲の事
二 和名の事
三 夜宴ヨ燈ヨ油を加ふる説
四 裘の事
五 雷の事 并天狗の説
六 水滸傳の事
七 酒の趣向の事

八 梨も礫も打ぬといふ事
九 川越合戰の事
十 神代杉の事
十一 六指を治す法の事
十二 身力よ不應の事
十三 食後睡眠の事
十四 素心先生墓の事
十五 好事不如無の事
十六 眉間白毫の事
十七 蝦夷地の事
十八 弓鉄炮の事
十九 殺生石の事
廿 天地の事
廿一 山田春城の事
廿二 陰陽の事
廿三 什物の事
廿四 岡西宗貞の事
廿五 虛誉の事

附小松重盛の事

茗會文談卷之一

錦城　大田元貞才佐　著

㊀人欲の事

世間の人の諫をふせぎ非をかざり人を千里の外まふせぐ遁辭まる其事をもくも知りもせずしておかめより評義す其内へいりて見れば又一路の方法ありておもひの外ますてられぬをありもしいふふり是尤ふる樣まて調法の言やうふり爰まる人ありてもれる人此欅蒲まふけるをき

びゝくいさめけるゝは其ゝ人退きていふばくち
の場へ一度ものぞまずして所のぞくゝいさめ
らる入て見ればむくんち仲間ゝも一通りの義理
法度有ておもゝろきをあり夫を知らずしてわ
がきらひふるゝ任せて人をいゝまゝむるハ無理
ありちいふ
その内へいらでも其事の是非邪正ハ明らかゝ
るとふり夫も一理あらんといふのゝあるハ不
学の徒ふり学問のかゝぐけふきハ諸事ゝ其為

まあらざるを以てゝしかとければ ふり秦皇漢武
より已来代々の帝王諸の勢を逞ふしつくして
此上ハ古の富貴をふゞくたもちときちいふゝ
人の慾心より道士の道を信し長生不死の仙を
求めいさむる人ゝ所れば其君の心ゝ所ゝらずか
もくん仙術を少ゝも會せずして只かきせぶり
ゝおゝゝるせまきゝ簡ふり宇宙の間いうゝあるこ
とのあるもゝられぬ事ふり已が信せざるをもて
皆々偽りちいふ豈理ふらんや是まゝ廣大の見

といふべし然れども長生不死といふをいふき
事は決しそり老子の長生不死親分道示死して
不辺者壽（原文のまゝ）あぜいつるは人為を以て天年
を害せざるをいふ羽化超昇（ハネヲモテテンニノボル）の道ありとはいは
ず古今仙を学ぶ人一人もして仙をふらずゝへ
りて殃を得る事往々あり皆方士どもゞ人を愚
まするゆりその愚まするを雖有かりて仙術も
ふき事ふらずあらぬハ修行のとらぬえ信して
よく修せばふぜゝ仙人もあらざらんもいとゞ

此惑ひいつもくべしも見えず考るしもあき
事をよもやどのえまたのみ一生くらせえの中
ま網せられて終るあさまゝゝらずや

㊁ 和名の事

杏はもろこしより来れる声を用ひてあんずも
いふ名みて名つけてからも、ちいつりあしも
まと然るゝ声を用ひて奈子といふ たち花ハ田

道真守が取来れる故に田道花といへるら菊ハ
今の京にありて来れるか万葉集の歌に草木の花見
るにそらぬものをおほくらめり菊はあら山に
ある一重の菊ハ外に和名の有けるあるべしも
ろもろしより菊来りて出れるも菊の名をおほせ
たり

㊂ 夜宴に燈に油を加ふる説

夜宴に客の帰らんとする時燈に油をくはへ爐
に炭を加ふ人是を評していふ礼なり又人いふ
客をもてむる術なり又人いふ客は伊らす帰る
ふりかんすれハ我を止むるなやと悦ぶこと實ハ
客を止むるにはあらず主人の心ハいつれあるや
知らず
第三の評の如くならば偽りあり今當時はかくの
ごとくあるをかしてきく仕うとちいふ道にそむく
事甚し

第二の評は霸者の心よ似たり
第一の評おどやかなるまして君子のてゝろあらん
礼ちいふ内よりゝゝむ心もあり文雅の心もあ
り此礼ゆらすゝもも礼家の礼よりゝらずされど客
を止むる實心を言よりゝらはさずゝして所作ああ
らんすゝ礼記ハ燈ハもちをゝらはすも見え
たり同じ心ゝ

㊃ 裘の事

裘を着用するゝ日本よりてハ織れまりもて古よ
り用ひぬもあるへる人あり誤れり聖武天皇神
亀五年渤海國より貂皮五百張を貢せしゝりあり
是裘よ作る皮ゝ貂ハある說よりてんも獸まりも
もいふ光孝帝の御時參議以上ハ貂裘をきるを
をゝるす參議以下ハ禁せらる源氏ものがたり
よ末つむ花女ちゝてふるき裘をきられゝるを
ゝるす然れハ貂をきるをゝはぬ官人ハ外の

裏を用ふるを恥てあるべし凡そ此ごろの風
俗は全く唐のありさまと見えたり

五上 学問をすれば貧まるといふ事

或人の戯話に人ありいふ讀書学問はよき事ふ
れど一の疵あり身持をよくせねばならぬとふ
り是疵ありといふ是よりてわれふに今の世
此学者の身持のよきを見れば道学先生にて笑
ふ此人の口る所あり又人ありいふ讀書学問ハ
よき事なれども一の疵あり高慢なるが疵ふ
り讀書学問すれば心量ひろくなるゆえ物の理
を知りて諂媚なるべし高慢なるハ井底の
蛙の類なり
又人のいふ讀書学問はよき事なれども一の疵あ
り貧乏なるなれ一の疵ありて讀書学問すれ
ば人々の職業をつとめる事をたり才を長じ知
をます貧なハならぬゆえもし貧なるならば時

をもりて是は安心して樂む心生す樂む境界は
いとれば貧も貧まらず貧てくまりて讀書学問
あき人ハ多くハ鄙作陋の誤乎の人ちある

五下 雷の事并天狗の説

或る人雷をもふ答へて曰是陰陽の激薄する処
あり
かとちらは儒者ありていふ天地の間変經はら
るべらず人とづらの智ありていんで其實を
知らん古人の説は雷は獸なり又ハ雷神ありて
鼓をうつこちいふ是實ならんもならず手あも
りて見ざる事あれどいまだらーく陰陽のとさ
もいふも畢竟これあるとみる朱子窮理の弊
ありちいふ
予答へて曰本より変經はらるべらず是を知
らぬハ我智のいまだ至らぬ故なり故は聖人も
いへども知らざる所あり今かりは日月の食の

術數知らざる世まらんに人あり其術をひとり
傳はりて明年何月何日に日食又ハ月食ありそ
の食の樣まれくちいたんにそなへおい定めて何
によりてあると問玉たんそのの人そのの理をいふ
中捧腹して日月のを泄凡夫いらんぞはかり知
るべきやあらんと笑ひ玉はん明年に至して果し
てもの食して少〳〵もとがはずハそなへおい赤
面ぞ〳〵玉たん是そのの智いまだ日月の食を知
るに至らぬ也あり雷の說も是に准ずべし日
食の說古來同し月食の節說乎は朱子ちいつぢも
夫に智の至らぬ也に暗愚の說を信ぜられて
り地影の說出てより古說皆廢す明の謝在杭が
說よりそなへ似るふ腐儒の淺見ちいふべ
し
ある人天狗もいふ事をちふ予答へて云深山幽
谷窮陰の地にまこと陽氣陽物至れば まこと擊薄
して山鳴り石飛ひ種々の變經をなすべし是を
世の人天狗のちわざちいふありとちへ共に愛に

火藥百斤ほうらんよりづゝ一点の火おつる時一二錢目の火藥皆一度に激迫逆出し家をもはせ塀をくづし人畜をもはず一時に糜碎す此をはりこ

このほうらは儒者のいふ先儒天狗の說をつくり天地の間に一物あらんも知るべからず此說をぞやうあり陰陽の說は尤らくにあれども是は朱子窮理の弊より知らぬに知らぬまでもあくづしいらぬ陰陽せんぎこといふ

畢りの二字ゆゑは異の字の誤

予答ふ本より天地の間一物ありて種々に變化すその一物といふは陰陽に過ず其先儒の心には鼻たらく頭巾を着肉趨（つぼき）ありて立付をはきる物をいふこれば一物が仏菩薩もあり羅漢明王もあるあるべつり是偶人を作り金箔をめり畢り形殊相あるものもひとつにせり是その智いまゝ以あらぬよりあゝる異形のもあもありもあるへりは凡そ天地の間皆怪異あり事をなむものゝいふ怪異はあきものも知るべ

し

㊅水滸傳の事

委巷叢談曰錢塘羅貫中者南宋時人編撰小說數十種而水滸傳叙宋江等事姦盜脈編機巧甚詳然變詐百端壞人心術其子孫三代皆啞也ちつり

人の心術を破るもいつるは過愚もいふべし只無用の書をあゝ紙墨を費すハ天物を暴殄すも

いふつしゆし其機巧をいはゞ千世西鶴原文のまゝ

らが作玉へる草木ハその巧水滸よりまされり今

唐ずきをする人師をとりて水滸をゝみあらひ

甚だしきハ譯語をつけて梓行す無益の至りも

いふべし

㊆酒の趣向の事

上頓の辞せよ

我死ばゝ備前の土をあしてゝ
もらゝやもくりよりもそそせん
山上憶良の心をかふ〳〵り
又郭杲絲死曰
屮葬我陶家海側庭化爲土幸爲酒壺
和漢ともに酒のゝはわるし趣向なり

㊇梨も礫も打ぬもいふ事

梨もつぶてもうゝぬもかまはぬをいふ
らんてをつれあきよ用るゝ本意をうしふ〳〵り
潘岳美姿毎行婦人擲菓盈車張孟場至醜毎行
小兒以瓦石投之亦滿車
亦の故事より出るゝらん
老人ありていふ今時書生故事をり自慢して附
會の說多しての言ゝる音もせぬもいふ事をい
へるものあらんむづかしき事はあらじとも
り

予いふさまの給ひそむくし鎌倉時分禪宗はや
りて俗人も僧も問答してよろてべり僧は文字
もあれば漢語をつかひけるその言傳来してい
ひむろまりたりも見えそり漢字のたら〳〵き俗
語おほくハあるる文字ありおぼ〳〵侍るもき
一いめるいまんもいふをばハ往の字まて四
くゑ上方まて帰るをいめるもいふハはや
まれり江戸まていんぬ詞あり立とられい
まばもよめるも立とられ四くもつゞけと
り帰るも かけとるまはあらず

㊈川越合戰の事

廣間まの物頭以下勤番のつれ〴〵の儘まの物ゝそり
しけり當番の醫師倫閑して来り咄を聞くまの物
語の咄まの川越の夜軍をいひて氏康八千の兵ま
て両上杉を敗るまに至る醫師いふ其軍ハ夜まは
あらず晝の軍ありもいふ 物頭きく もあつず

法印ハ醫師なれば療治の事らんてそ給は
め武辺のをハわれらの職分なれば覚え遠るを
はあしちいふ
醫師いふ本よりさあるべし されど醫師も武辺
咄をすくもあるいもまあハ記録をもの そき侍
る武士なもとまく醫の道をすく人なりて醫師
よ手をちらす事なるあらひありちいふ
物語それハ浪人する時くらひ物おきを悲くし
て用にハ療治をそ〳〵まむて〳〵なけ侍の事あり

ちいふ
醫師さもあらん張仲景ハ長沙の太守なれど醫
者の祖と貴む 仲景あんで浪人の氣遣ならむ今
時の武士非義をあして追出さる、時辻切追剥
ならば非道なからも武辺ハ似うり多くハよし
原の太鼓をもち又ハ銀借しの口上を業もあす
是よくらべてこれハ醫師よあるはまゝあらん
ちいふ
物頭するしだまりたる内る物見あて板を打け

れば論はやとゝり
さの軍のを物頭の覚へ違ひまてハ夜軍まては
ふゝ書ちいふを實説ちすもあむ

十 神代杉の事

北村政種ちいひし人の物ゞゝりは箱根の温湯
ま浴しけれる頃ば其の地の細工人神代杉ちつつる
杉まて箱のゝゝひをてしらへ何ちてらくハ名
付るぞも曰ふま此箱峰の湖底より大木の杉あ
また引出しゝゝりいつの代の木ちいふを知らず
よりて俗ま付し名ありやも問ければそれをけ
ら木も名付申さんもいふ心ハいうまも問ふす
べて土地のさゝいのゝゝるしの木をけゝれ木も
申侍るさの湖辺まゝるゝべきまゝし申傳へ侍る琴
乃木のいつれ時まゝ湖中へゝれいりゝるふ
らん又俗ま西行法師の歌ちて
あしがらや箱根の海まけゝらあり

こゝをかけてうつハ白浪

ちいへる哥のさま西行も見えねども ちれら
ありて此杉ハさらぬ木なるべしおりて申侍
るもまんいひける
予北村氏おもふよ山中なて自他の境をしらす
まおほくハ松まれ生木の大なるを
証據もすてのけ〻れ木伐しも今の栅をなるた
るまハならじ大木のたげりなるあらん山くづ
れ峯ついへて落入るまゝて是をいてこれを

これば かひなをさやるもこゝりけ〻れふく
の哥のけ〻れふくを心ふくといはんよりさら
い木ふくも心得ばよろし聞え申さんも政種申さ
れける
さの政種ハ津輕の家臣なり惟足齋神道傳授の
人なりて哥は江戸なて人のたりなるほゞの先
き人こ冷泉家の門人こ

十一 六指を治す法の事

生る、子六指あらば七夜の内よきりて取るべし血も出す痛みもいまだ覚えず癒て後踵もし七夜を過ぬは切ても踵より生るものなり

十二 身力は不應の事

力の極めてよわき人至りておもきものをあげんとせばかゝはらの見る人かゝはらず笑ふべし世人わほん浅智の身にて大将のするをせんちすは是もまゝかゝはらの人笑ふべし

十三 食後睡眠の事

諺に食後一睡万病圓といふある人いふ圓はらす縁〻万病のよりて生するなり与しあし相反せり唐に杜郷もいひし人満腹あらばゆいねたりある人養生の為にはらすといさめ〻に君は布袋に米を入れるを見玉はずや横に倒せばゆらすゆるまるといつり何れかそもそもりに

らむ

余ものもふよ飽後枕をもりて臥すのうは可ちら
む熟眠(ねむる)をハ勢るべららす

(十四) 素心先生墓の事

京五条長講堂境内ハ尋倫底の墓あり前待詔侍
講藤原素心墓もあるある人のいふ正保の頃
天子ハ易を授け奉りし人もいふ勢るや否やを
審ハせず

(十五) 好事不如無の事

志せ せまし せすや ひらもしもあるもふをハ大や
うせぬがよきふりもいふ語を愛好法師よろて
びてつれぐるハ万きのせゝり吾れも亦れハ似
る一語あり ひりてもしもあるもしもしもち
ふをハ大やゝハ ふきがよきこ 諸子の説是ハ

近し好事不如無といふ語は亦人のいつるふらん又らくいつり

十六 眉毛白毫の事

ある人 法華經は釋迦眉間白毫東方百八千界を照すとあるをうて仏の威光八千方を及ぶべきは東方はかぎりたるはとけあるてもかも問ふ

余答ていふ もとより 此經中は又遍照於千方も見えたり然るは所々は東方とあるは羅什は天竺の人にて天竺より東方は ある唐土へ来りて此經を譯す此東方の唐土も皆仏の法身にて立つ事をいふをを知らしめんとなり 梵文は偏照於十方の心なるべし羅什が中國をいはゞ東方といつるこ

十七 蝦夷地方の事

ロロロロは七郎兵衛といつるもの蝦夷へ商ひに行くを十二度ゐ及つり彼所の活は商人を陸に上げて此人ハ夷人もとく見知りちかしみるべ
ゆるして陸にはゆがらくむよりて所々を見物しよ
く覚へくりある時海中にて大風に逢ひ一所に
漂着せり日みさへぎるものみな蝦夷の様子こ
されゼ子午針を見るに蝦夷の方にあらず疑は
しきうちに所の人あつまりて ちやくく問答す

る内に少くく言の通する人あり所をたへば朝
鮮の直あんもいふ暫らく逗留しておくりくへ
されくり されをもておもふに蝦夷ハ朝鮮につ
ぎくり ちいふが誠より蝦夷ハ津輕こうまを
ちいふ所より七里渡海し松前に渡る是より西
北へひろがり南ハ朝鮮の咸鏡道に至り西北ハ
女真の界に接すも見えくり
松前より北上の國下の國もいふ所へ往還各こ
八日路より松前よりの呼名このはくりにて及

ふそれより奥ハ人ヒとくハ知れず大てい日本
の地ハ近き所ハ蝦夷の辺部より奥ハ至れば繁
昌すもいへり

十八 弓鉄炮の事

弱き弓ハ一寸二寸二分までもあり一尺の弓も
いふハ矢きをこ一寸二歩の弓なれば一尺の弓
あるまゝきるもあらすちつはゝ弓の理を知ら
ぬ人あり
僧ハ儒者ありていふ云らず大人の国にて大
竹あらば一尺の弓もあるべし今日本一国のつ
もりにていふハせまき見こと
あれ然らず家語ハ防風焦荒の事ありて短長の
極もせり一尺の弓ハ防風の類にて此も引得る
ものなるべ
儒者又いふ鉄炮にてあたりてハ三匁四匁の
筒ハ常の事こゝれより五十目百匁あるべし一貫

目なふ五貫目の筒もありまんそその弓の説
ならば五貫目の鉄炮はあき理といはん笑ふ
べし
答へていふそれそあハ弓鉄炮の理を辨つら
れぬありさいいつるん弓鉄炮ともよ人を殺す
ハひちつよて其用ハ至り弓ハ人の力ていい
るものゝ鉄炮ハ火の力ゝて討ものゝいう程の
大筒ても一点の火よて打出すをあれバ五貫
目の筒あるまゝもれハ申さあり然る物

よハ極まりあり十貫目二十貫目ハあるまゝ
りても持運びよ便あらざればまり

⑭ 殺生石の事

奥州白河の人喜内といへるがいふ那須野殺生
石を見侍りしよ方四五丁程垣ひまはし其中
よ石大小あまゝあり いつれか殺生石あるをを
知らず其傍よ鳥獣の死あけるものをあまたあ

り時ありて其ほもり吹出す氣ありその時は
ハ垣の内はさらえあるり〳〵も近づくべからず
生豆をかゝる時のときあるきまひたる是は
ふる〻ものハ人畜を撰ばず皆卒倒すかならず
しも石は毒あるるハ限らずもちん
てれて實説あらん枯井廢宮は入て陰氣はなひ
死するも同じ世ハ信石ありもいつハ信石ハ製
して火を得て毒甚しおよそ下野の國山川風景
のすぐれ有さま大は他國は比もあり

廿 天地の事

生々之謂易、天地之大德曰生、宇宙の間只何もは
人生々するのみ生々の行はるゝハ死もいふを
はるまゝ為ハ死も亦生もいふて諸
子えづからの道を立て天地の外は至理あり
ハ見ぬ所は至理もあらばあれ先眼前の天地は
くんに人もあく事もあく法もあし皆天地あり

ての上なれば其人其法もまた天地の外なのが
る、ちまち知れば天地外の道を託らもも天地
内の道を本ちすべき事こ天地内の道もい聖人
の道なり

廿一 山田春城の事

昔山田春城といふ人あり人と為り寛裕言詞正
直無所阿枉無好小藝不拘忌崇頗得儒骨と文德

實録あのせられそり嵯峨太上皇の皇子深淵の
学業を成就せんもおぼしてらしき学友を求
め玉ふ時山の春城えらばれてめこ出されそり
後駿河の介ちふる此國ま阿氣多神といふ神あ
り称宜ぢも種々の奇怪を作りて國司又吏口を
まどはしめそり春城任ま至るも其儘其偽りを
しめるをたこしてらそし是を禁制しそ歳
時の祭礼のこをつもめさせけりそれより國中
の妖言永ムこえ人々其聰察ま感服しけりもま

るされそり
此時上下ちなる神よへつらひ仏を佞する時ハ
るる此人のミ卓乎ちて流俗をとがけず儒
者の風骨を得そりちいへるもうへちるるふ

㊀陰陽の事

天地の間ハ陰陽のミ仁義も剛柔も皆陰陽ちり
てのそちりを従ふを人の道ちす天竺もろて
しわが国もおよそ人の人ちるの国てれよもる
ゝをふくいまゝ伊弉冉尊先ちて言をあげ
玉ひ〳〵ちば伊弉諾尊てれめをのをちりまとが
へりちてはらちめ嗣らせ玉ひて男神言をあげ
玉ひ〳〵ちバこの大やしま定りたゞまり日の神
生れ出ちせ玉ひ無究の神祢をひらき玉ひり
ふぎちちもむべきちちらすや

廿四 什物の事

人家の器物を什物といふハ周の軍法五人を伍ともし二伍を什ともして其器物をとりもちてとすよりいひたるめりもし元の虞裕が談苑まつりの俗寺の器物をかぎりて什物といふはあやまれり

廿五 岡西宗貞の事

岡西宗貞といふ人ありて不定まれでまてぶるさもき生れつきこけりれがいひけるハとれ仏道を何もちく遣ふ仏をおがこぬうづき僧尼ハ物をほどこ先ありされで人の生れかはるもいふ事にあきを故ハとれば仏ハ信じ侍らずこもへば今日本の人を男女をわかちて四五十年別々ハおかばく人ハあくまりて出鳥獣のこほありふるん若其時ハ男女相交らずして自然もこをうこ又ハ禽獣のとくがとくハ人生れ

出るもいたて是道理を知らぬ人まれハもゝよ
かるるよりたらぎるゝ人ハ男女相交りてゝら
そよ生つゞけよ生つゞけるゝより古物を用ゆる
よりゝらずも申き

廿六 虚誉の事

附 小松重盛の事

世よ虚誉もいふものあほきゝ凡夫のちゝほふ
らぬまゝよすてゝしきを何まりよもりあは
やまり

小松重盛これ有るべし父ハ清盛ちいふ驕慢
の人あり下ハ宗盛ちいふ頑愚の人あり是よ
見ゝらべて重盛のわちまきを賢人君子ちい
へるより誠よ賢人君子ちいば其身大臣の大将
を辞し諸侯卑下ちいば虎よのるの勢あるゝし
清盛ちゞいはゞその時ゝそ古今を引富貴を極
れば家の災ちるゝを説ば清盛ちのれをすくふ

の道もて補

富貴を捨てぬれば是より子孫をはらる心出でもせず承引せさらん是より重盛心の儘に行はるべし

重盛の身よりてハ先清盛を席よりおろさんとれば君臣の道立がたし勢つきてをるゝとも理をそりてうづらをるゝちは大に心をたりふん諫をいれられざるもうづら法皇を押込奉るをやめられざるのうより其の外の罰は自然のゆるまひハ申もあらゝまらず其身富貴を極め藤氏のれきゝより官階超越し子弟一同公家を凌歴蹂躙し天下の物情洶々たりて人神怒りあんむよいそりてせんすゝらず世をのがれんちし命をちゞめんちし燈口の非礼を興行し金銀渡しの愚痴をふす是一已の現世未来のやすきをはらるのみなりて果して世の為め家のため何の益そ也もし公忠の實心あるまはんあハ清盛ふゝきの事のゝ行はれん まは主上上皇の命をもて行ゝため置んも不孝ちいふゝ

のらず區々なる小松殿を教訓聞もはうもん覚
ゆゑ考らるゝ賢人ちいふハ誠ゝ虚誉まりも
覚ゆ

茗會文談巻之一終